

---

# 空白のトキ

木村よし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空白のトキ

### 【Zコード】

Z17801

### 【作者名】

木村よし

### 【あらすじ】

優しい×不器用。スレ違いの切なめ話。

恋人同士の俊と亮太。亮太はモテるし俊には佳祐って幼馴染みがいて…！？  
この恋、どーなっちゃうの！？

男子子同士ですが、BL苦手な方でも読んでいただけたとおもいます。

完結済み

## 17歳（前書き）

初のBLものです。  
作品を覗いて下さってありがとうございます！  
一言でも二言でも『感想頂けるとともに嬉しいです！』  
みたいに嬉しいお願いいたしました。

では本編へどうぞ

『もしもし』

「もしもし…」

『俊? どうしたんだよ、何か暗いじゃん』

「亮太と、もう別れる。」

何度も別れ話だ? これ。  
多分9回目だな。うん。

そしてその全てが俺からという…。

『んー俊? 何が嫌だつた?』

焦ることなく問い合わせてくる亮太は、もう俺からの別れ話にも慣れ  
ているようだ。

「…昨日の放課後、女の子と手、繋いでた…」

亮太と一緒に帰るために靴箱の所で待っていると、ゴミ箱を持った  
亮太と、亮太に腕を絡ましている女の子。正直、女の子が一方的だ  
つたのは見るだけでも分かつたけど。

何も言わずにされるがままになっていた亮太にもイライラして。

『あーあの時かな。手繋いだわけじゃないんだけどな。』

「亮太が、女の子がいいなら、俺…」

携帯を持つ手が、震える。

『まあたそんなこと言つ。嫌な思いさせたなら』めん。俺は俊がい  
いから。』

電話越しの心地好い亮太の声。

まるで耳元で囁かれているかのような錯覚に陥る。

『俺は、俊と別れたくないよ。』

優しい亮太の笑顔が目に浮かぶ。

「…ん。わかつ、た。」

『じゃあもう遅いから早く寝なよ？明日の朝も迎えに行くから。』

おやすみと言つて電話が切れる。

俺は携帯を枕元に置いて布団の中に潜り込んだ。

俺と亮太は、半年前から付き合つてる。

同じ高校で、同じクラスで。部活まで同じで仲良くなるのにはそんなに時間はかかるなくて。

先に好きになつたのは、多分俺。

でも告白してきたのは亮太からで。

亮太は、優しい。

ルックスだって良いし、勿論女の子にもモテるし。

だから。

俺の幸せはいつも不安と背中合わせなんだ。

俺は女の子じゃない。身長は168センチで小さめだけど、美少年とかじゃないし、性格だって素直じゃない。

不器用で。

ちょっとしたことで亮太と付き合つていく自信なんてすぐに砕けてしまいそうになるし。

俺は亮太に相応しくないんじゃないかな?

亮太はやっぱり可愛い女の子の方がいいんじゃないかな?

そんなことを考え出したら止まらなくなつて。

「別れる」

すぐにそう言つ俺。

でも亮太はその度に、俊がいいと言つてくれて。

そうやって、俺は安堵するんだ。

あ、まだ俺は亮太のものなんだつて。  
必要とされてるんだつて。

俺はさ、

亮太が俺を見てくれる限り、亮太のものでいたいんだ。

\* \* \* \* \*

「なあ俊、今から暇だろ？」

「ん？うん。暇だけど」

講義が終わって夕方の橙色が教室を染めている。

大学生になつて初めての夏。

小学校から仲の良い幼馴染みの佳祐が「じゃあ2人で飲みにいこうぜ」と言つてきた。

どうも安くて美味しい店を人から教えてもらつたとかで。

「ん。別にいいよ」

確か今日は亮太もバイト仲間と飲み会つて言つてたし。

帰つても一人だから、俺は佳祐と飲みに行くことにした。

亮太と付き合い始めてから2年近くが経とうとしてる。

俺たちは別々の大学に進学したんだけど、2人でルームシェアをしてるから、まあ同棲のようなもので、一緒にいられる時間はそんなに減つてない。

帰りが遅くなる日とかはちゃんと報告しあつて。正直まだ不安は全くないと言えば嘘になるけど、それ以上に俺は亮太といふことに安心と幸せを感じるようになつてた。

「つまーい。」

駅の近くにできた広くて綺麗な店内。どうも関西では有名らしい大手の学生居酒屋らしい、この辺りにできたのはこの店が最初なんだとか。

「ちょっと俊！このホッケまじ美味いって！」

そして目の前の佳祐のテンションはマックス。ホッケに感動してる……。

「佳祐ー。あんま飲みすぎんなよ。」

俺は生中をチビチビと飲みながら苦笑する。この調子だと酒も飲みすぎて潰れるだろな……

「だーかーらー飲みすぎんなつったのにー。」

「えへへー世界が回るわ俊けやーん。」

完璧に出来上がってしまった佳祐に肩をかしつつタクシーを拾う。タクシーの運ちゃんが酔っ払いを見た瞬間明らかに嫌そうな顔をしたけど、無理矢理佳祐を押し込んで佳祐の住所を伝えてから俺はタクシーから離れた。

小さくなっていくタクシーを見送りながら、俺も帰路につく。駅の近くのアパートを借りてからここからそう遠くはなかつた。

「あれ

鍵が開いてる…。

ドアを開けて中に入ると、リビングは明かりが付いていて。

「亮太？帰ってるの？」

靴を脱いでリビングへ向かうと、ソファに座ってる亮太がいて。  
なんだか、いつもと違う気がした。

「りょ、亮太？今日、飲み会、早かつ」

「途中で抜けてきた。」

静かな亮太の声。

だけど、何故かそれにビクリとなる。

「俊こそ、遅かったね」

「え？あ、『ごめ、佳祐と…』」

ダンッ！

テーブルを叩く音。

大きなそれは、本当にいつもの亮太と違つてて…

「れ、連絡しなくて、ごめんなさ  
「ねえ俊。」

今まで背を向けていた亮太がこちらを向く。  
その目は、いつもの優しい目じゃなくて。

「別れよっか

え…?

今、なん、て…

「りょ…」

「風呂入つてくる」

俺の横を通り過ぎていく。

俺を見ては、いない。

リビングに一人ぽつんと残されて。

「あ…え…?」

何か、『じちや』『じちや』する。

頭の中、俺…。

別れよっか

あ、そつか。  
そなんだ。

俺に向かはれなかつた亮太の視線。

やつと理解できてきた。

俺は、  
いらなくなつたんだ。

シャワーの音が聞こえる。  
その音が妙におれを落ち着かせて。

リビングを出る。

風呂場への扉の前に立つて、

「今までありがとうございました」

小さく呟いた声は、多分亮太には聞こえていないだろうナビ。

俺は部屋を出ていったんだ。

## 23歳～亮太 sides

\* \* \* \* \*

会社にもやつと慣れてきて、今日も同僚数人と軽く飲みにいつて。夜も更け閑散となりつつも、酔っ払いやキャッチなんかが行き交う駅前。

もうすぐ11月といふこともあり、夜は大分肌寒い。俺はスーツのパンツに手を突っ込んだ。

「？」

駅前にしゃがみこむ物体を発見。  
酔っ払いかな。

そいつは一人しゃがみこんだまま動かなくて。  
辺りを見回しても連れらしい奴はないし。  
見た感じまだ若そうで。

その小さな姿が、何処かあいつに似てるような気がして…。

あー俺つてば変わってない！  
変わらなきやつて思つてゐるのに…

でも気になり出してしまつたら仕方ない。  
俺はゆつくりとそのしゃがみこむ男に近付いていつて。

「あの、大丈夫ですか？」

「…え、あ…すみませ…」

のろのろと顔を上げたそいつは、俺の顔を見た瞬間目を見開いて。俺も、動けなくなつて。

「悪い！コソビニ並んで…さ…」

聞き覚えのある声がして、その方に顔をやる。ミネラルウォーターを持った後の幼馴染みが立つてて。中田佳祐つて言つたつけ。

「斎、藤…」

斎藤は俺の名字。

亮太と呼ぶのは俊くらいたつたから。

「久しぶり…」

俺の声は、少し震えていたかもしれない。

「悪酔いしたんでしょう？俺のアパートすぐそこだから。よければ来なよ。」

「いや、大丈、夫、だから…うつ…」

言いながら口を押さえる後に俺は、昔と変わつてないなんて思つたりして。

「中田も一緒に。お茶くらへ出せぬ。」

「どうぞ。そんなに綺麗じゃないけど」

ドアを開けて二人を招き入れる。

とりあえず俊をトイレに直行させて。

中田も一緒に入って俊の背を擦つてあげたようだ。

出てきたら俊は俺のベッドにそっと寝かせた。

「突然悪いな…」

中田（佳祐）が頭を搔きながら言つ。

「いや、誘つたの俺だし。中田は気にしないでよ。」

「なんか今日すげえ飲んでや。」

一人で後の方に手をやると、静かに寝息をたてていた。

「なあ、斎藤。」

「ん？」

「なんで、別れようつて思つたんだよ。」

中田は真剣な顔をしていて。  
俺の頭に4年前の夜が蘇る。

あの日。

あの夜。

「なあ、なんで」

別れよつか

「…それは」

「俊、あれから誰とも付き合つてないだ。」

え？

「今はやつと普通に笑つたりできるようになつたけど、あこつがど  
んだけ苦しぃだかお前知らねえだ。」

何言つて、

「…」  
「…」  
「やめひきせ」

いきなり響いた俊の声。  
見ると俊は上体を起こしていて。  
布団をギュッと握っていて。

「佳祐……も、大丈、夫だか、ら……。亮太も……」  
「うめ、ね……」

力なく言つた俊は、全然上手く笑えてなくて。

俺から先に離れていつたのは  
俊、お前だろ……？

「ごめん、中田、一人にして。」

「え？」

「ちやんと送つてくから。」

「……わかつた」

「えつ……佳祐……？！」

また明日な、と後に微笑んでから、中田は部屋から出ていった。  
急に静かになる。

「あ、えと……俺も帰……」

ベッドから立ち上がるとした俊を、俺は再びベッドの上に押し倒した。

「いっ……りよ、た……？」

不安そうな俊の声。

「俺、知らない」

「え…？」

「俺の前から居なくなつてからの俊のこと、俺知らないよ。」

シャワーを浴びて。

イライラする自分を落ち着かせて。

出てきて謝りうつと思つたら、もう俊はいなくなつていて。

「連絡もとれなくなつて、大学に行つても会えないし、バイト終わつて帰つたらお前の荷物がなくなつてて…」

俊の両手首を掴む手に少し力が入る。

「鍵、ポストに入つてた時、俺がどんな気持ちだったか分かんのかよ…？」

携帯の番号も変わつて。

どこにいるかも分からなくて。

いつか戻つてきてくれるつて信じて待つてた俺が。  
ポストに入れられた鍵。

もう終わりだと。

告げられた瞬間。

「俊は、不安だつて何度も言つてた。」

「その度に別れるつて、俺は何度も言われた。」

俊の目から、涙が溢れた。

「不安なのはーお前だけじゃないってーなんでわからなかつたんだよー。」

俊は明るくて。

誰からも好かれていて。

幼馴染みの中田は俺より俊のこと知つてゐるし。

あの夜、バイト先の友達との飲み会の途中、俊と中田が一人で店に入つて来るのが見えた。

何も言われてないのに。

酒が入つていた俺は、なんだか無性に苛ついて。

飲み会を途中で抜けた。

「俊に別れたいって言われても俺が傷付かないとも思つてたのかよ。」

「つょ……」

「けど俺は俊がよかつたから、好きだったから、その度にちやんと言つてきただろ……」

不安なのはさ、俊だけじゃなかつたんだよ。  
俺だつて中田のことすごく気になつてたし。  
いつか中田に俊を取られるんじやないかつて。

「なんでだよ……」

「なんである時、お前の気持ち言つてくれなかつたんだよ……」

別れよつか

本心なんかじゃなかつた。

俺も、ちゃんと答えて欲しかつたんだよ。

お前が俺に望んでいたようだ。

「別れたくないって……なんで言つてくれなかつたんだよ。」

俊、あれから誰とも付合つてないぞ

なんで。

今はやはり普通に笑つたりできるよになつたけど

一言で良かつたのに。

俺のこと少しでも想つてくれてたのなら、

あいつがじんだけ苦しんだかお前知らねえだろ

なんで俺に伝えてくれなかつたんだよ。

「す……め……」

え……？

「りょ……た、のこと……すきだつた、から……」

涙を流しながら、それでも俺を見つめる俊。

「つよい、たが、俺のこと、こらなくなつ、たら……邪魔に、なりた  
く……なかつ、だから……」

俺の下で震える、小さな身体。

「好き、だよ……」め…今、も…りょ、た、が…好き、な…んっ

もう、我慢できなかつた。

「つょ…ふあつ…んひ…」

俊の唇を奪う。

貪るよ「う」。

混ざりあつた唾液が、俊の頸を伝つて落ちた。

「はあ…亮太、俺のこと、いらなくなつてない…？」

「んな訳ないよ」

この4年間。

俊を忘れられたことなんてなかつた。

「俊は、俺と離れたい？」

俺は俊の頬に触れる。

「…や、やだ！亮太と離れたくない…」

ギュッと、俺の首にしがみつくり腕を回す俊。  
俊の素直な気持ちと、その温もりがなんだかすこへ幸せで。

「また一緒に暮らそつか

空白の時は埋まらないけど。  
俺たちせきつと、今から誰よつも密な時間を過ぎはじめていくから。

おわ  
り

## 23歳～亮太sider（後書き）

お久しぶりです、木村よしです。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます！

今回は初のB-Lモードとして、次は女の子同士か近親相姦ものを…と  
田論んでいます（笑）

一切ない ハピエンを田指して書いてみました。  
切ないって難しいですね…。

一言でもなんでも良いので（それじゃ「読んだよ」だけでも）、何  
かじ感想などを頂けると本当に嬉しいです。必ず返信させて頂きま  
すー。よろしくお願ひいたします。

ではでは

「空白のトキ」を読んでくださって本当にありがとうございます。

これからも木村よしとよしの作品たちを暖かく見守つて下さっこー！

木村よし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1780i/>

---

空白のトキ

2010年10月13日15時38分発行